

平成20年度 第1回新宿区次世代育成協議会・部会の報告について

平成20年9月1日(月)午後2時～4時

区役所本庁舎6階 第3委員会室

1 開 会

2 議 題

(1) 部会委員自己紹介

(2) 資料説明 **資料** 平成20年度新宿区次世代育成協議会・部会の方向性

平成19年度の振り返り「子どもの虐待防止と地域の役割」

虐待に至る前・産前からの支援・人材育成と確保・地域に根ざした日常的な取組み

平成20年度の予定

第1回部会 具体的提言に向けた検討

第2回全体会で の協議内容の報告を行い協議

第2回部会 の議論を踏まえた原案に基づく議論

第3回部会 ・ 回及び全体会の意見を踏まえた提言素案の最終協議 提言まとめ

提言まとめを協議会委員に事前送付し意見を集約 提言の最終まとめ

第3回全体会で提言の最終まとめについて報告

(3) 協議

平成20年度新宿区次世代育成協議会・部会の方向性

視点1 虐待に至る前の支援

視点2 産前からの働きかけ・支援のニーズ

視点3 既存の事業との連携・連続性

視点4 一人ひとりに合った子育て支援

視点5 人材育成とネットワークづくり

論点1 区民一人ひとりができる取組とは？

論点2 産前・産後の枠をこえライフサイクル全体の中で今後力を入れるべきライフステージとは？

論点3 利用したくなるサービスのポイントは何か？

論点4 「支援したい人」が「支援できる人」になるきっかけは？

3 閉 会

【意見】

思春期からの働きかけ・体験の大切さ

新宿区内の高校生が、3年間継続して保育園にボランティアに来ている。最初は、学校がきっかけ作りをしてくれた。学校による生徒への働きかけは、大きな機動力になると思う。

職業体験については、地域の方々に、大変ご協力をいただいている。オリエンテーションと御礼の挨拶も含め、5日間の体験学習である。日をすっぽかしたり、遅刻をしたりという生徒もいるが、子どもが確実に変わっていくことは実感している。また、クラスの中でリーダー的存在ではない子が、思わぬ力を発揮することもある。今後も地域の方々にご協力をいただきながら、取組んで行きたい授業のひとつである。

青少年育成委員会主催の行事へ、保護者と子どもと一緒に参加してくれることが多くなって来た。どこが主催ということはあまり関係なく、人と人とのつながりで来てくれる。組織と組織、機関と機関だけでなく、地域で生活している親御さんが協力をする体制が醸成されることが大切。しかし、地域の中には、様々な親御さんがおり、地域の行事や相談機関などに来てくれる方とそうでない方がいる難しさがある。

子ども家庭支援センターでのボランティア体験として高校生が来ている。その中で、やはり、子どもが変わっていく姿が見られる。

「ゆったりーの」でも、子どもと赤ちゃんの触れ合い体験をやっている。

思春期から、日常性の中で色々な場所(保育園・児童館・学校の体験学習など)で、乳幼児と触れ合うことは大切なこと。そこから、次世代育成が始まり、子ども達が親となったときの虐待防止につながると思う。

複合的なサービスのコーディネート必要性

その家庭に合ったサービスを基本としながら、複合的なサービスを紹介しつなげていけることのできる力が、求められているのではないか？色々なサービスがあることや、便利さもわかっているが、色々な種類のことをコーディネートする機能が、公又は民に求められているのではないか？行政には、縦割りでない横断的な役割が必要。

すすく赤ちゃん訪問事業も乳幼児健診と併せて力を入れて行きたいと考えている。

民生・児童委員、子ども家庭支援センターと保健師の連携は、大変、重要である。

虐待は、家庭が孤立している煮詰まった状態で起こる。この家庭を孤立させないために、少しでも地域の方々にご協力いただければと思う。

ホームスタートの例から。家庭訪問をする段階から、自分で外のサービスを利用することができるようになる段階まで、まず、はじめに、支援が必要な家庭を「受けるときと渡すとき」のつながりが大切だと思う。

支援が必要な家庭を選別するということは大変難しい。日本には、家庭訪問を受け入れる身近な相談機関や保育園や児童館に行って、話して、相談することが当たり前になる土壌づくりをすることが大切ではないか。

子は地域に関わっていても、親は関わっていない状況が、家庭を孤立させることにつながる。例えば、保育園で色々なサービスにつなげていくようなことが必要では？

子ども家庭支援センターの「育児家庭訪問事業(産後支援)」という産後の育児や家事を支援するサービスがある。最初の訪問時にベビーシッターさんやヘルパーさんの他に、児童館の職員か子ども家庭支援センターの職員が同行し、子育てに係るサービスをご紹介している。そして、訪問時にリスクが高いと思われるご家庭に養育支援ということで、引き続き訪問をさせていただき支援をしている。例えば400件に訪問したとしても、そのリスクの高い家庭が4~5件見えてくれば良いと考えている。

家庭による親と子の関係・子育て観の違い

母子カプセルの中に入ってしまったような親子が居るとい話を聞く。

子どものことを知らない親や、親が子どもを取り込んでしまい、友達のように対等な関係になり、親の役割を果たしていない親も増えている。

最近の子ども達だけでなく、大学生も変わって来ている。

幼保一元化が進んでいるが、幼稚園に通っている子どもの保護者の側から保育園の子どもに対する差別意識のようなものはまだあるのだろうか？

全く無いとは言い切れないが、ほとんど、差別意識がなくなっていると思う。差別意識の要因は、保育園のことを幼稚園の保護者の方がわかっていないことが挙げられると思う。保育園では、学ぶことをせずに、一日遊んでいるようなイメージを持っていることが多い。

教育と福祉(幼児教育と保育園における保育)で、教育に対する上位概念という傾向はあると思う。その差をなくしていくよう、幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂がなされた。

在宅で子育てをしている親御さんの不安感が強い傾向がある。地域で何かできないだろうか？